

恩 送 り



田 中 秀 治

2015年度より2年間、日本分析化学会理事および中国四国支部支部長を務めさせていただくことになりました。この年齢（54歳）にもなると人見知りせず会話できるようになりましたが、それは多少の経験を積んだことと鈍感になったことによるもので、内面は二十歳の頃とあまり変わっていないように思えます。役職名の重さと自分の未熟さとの隔たりに戸惑いを感じつつも、光栄なお役目をいただいたからには、気持ちを強くして日本分析化学会と中国四国支部の発展、本部と支部との橋渡しのために貢献したいと存じます。

中国四国支部主催の主要行事としては、分析化学若手セミナーと分析化学講習会があります。前者では、若手教員/研究者や大学院生の学術交流と親睦が活発に行われ、十分に目的を達成できているものと考えます。後者は、本年度第52回を迎える伝統行事です。一昔前は100名を超える受講生があり、財政への貢献も大きかったと聞きます。しかし最近、学生に受講生として協力を仰ぐというケースもあるようです。同講習会は産官学の連携という点でも意義深いものですが、分析機器メーカーの皆様には、顧客開拓といった短期的な目的のためというよりは、ボランティア精神で多大なご支援をいただいています。メーカー担当者様のご意見も仰ぎながら、講習会のあり方について議論してゆければと存じます。

学会の会員数の減少（+これに伴う財政悪化）が憂慮されています。直接にはリンクしませんが、博士課程に進学して研究の道を志すことの魅力が低下しているのかもしれない。大学教員として、研究の魅力を学生に伝える努力はしてきたつもりです。しかし、研究者になることの魅力となると、私の息子たちにも、自信を持って「大学教員になることは素晴らしい」とは言えませんでした。今は研究者にとって厳しい時代（より競争主義的、雑務過多）になりましたが、年齢や地位に関係なく、頑張る人にはより多くのチャンスが与えられるようにもなりました。とは言え、近視眼的な評価に偏らず、長い目で人を見守り育ててゆく根気と努力、そのための環境も必要かと思えます。

他分野から転向してきた私は、日本分析化学会（の皆様）の魅力をより理解しているつもりです。広範な領域・職種の方々がかかわる分野ですので、垣根がなくフレンドリーです。初めて参加した学会行事で、恩師も同門の先輩もいない私にまるで旧知の仲であるかのように接してくださった先生方の温かさには、いたく感動したものです。私事ですが、異分野で面識すらない私を助手に採用してくださった下村 滋先生、期待料込みで31歳の私を助教授にくださった岡本研作先生、人としての生き方を教えてくださった森田秀芳先生…語るときがありません。しかし、年々慌ただしくなり、学内外の仕事でますます身動きが取れなくなり、お世話になった先生に十分なお恩返しができないままです。その代わりと言っては何ですが、先生方に感謝しながら、私にいただいたことを今度は私が将来ある若い人たちに「恩送り」することで報いようと努めてきました。これからも、次の世代のために、そうしてゆきたいと考えています。

Hideji TANAKA, 徳島大学大学院医歯薬学研究部（薬学系）,
日本分析化学会中国四国支部長